

生徒同士でやり取りしながら 思考を働かせるための支援の検討

—知的障害特別支援学校中学部「生活単元学習」の授業実践を通して—

○福家 美香 滝澤 健 武藏 博文

(香川大学教育学部附属特別支援学校) (香川大学教育学部)

KEY WORDS: 知的障害特別支援学校, 協働的な学び, 支援ツール

1 目的

本校では、児童生徒の自立と社会参加の実現をめざし、「何を教えるか」(目標設定の工夫)、「どのように評価するのか」(評価方法の工夫)、「どのように支援するのか」(支援方法の工夫)の三つの視点で、協働的な学びを支援するための授業づくりに取り組んでいる。本実践では、「卒業生が喜ぶダンスを考えよう」の単元を取り上げ、課題解決に向けて、生徒がやり取りしながら思考を働かせるための支援方法の工夫を検討することを目的とした。

2 方法

(1) 対象生徒

中学部1年生、男子4名、女子1名の計5名。言葉だけでは意思を表出することが難しいが、絵に描いて自分の考えを表現することができる生徒が1名(E女)、自分の意見を伝えられるが、伝え方に課題がある生徒が2名(A男、B男)、仲間の意見を聞き、調整をしようとしている生徒が2名(C男、D男)と、実態は様々である。

(2) 指導期間

X年1月～X年2月 1回45分 計6回

(3) 指導目標

卒業生を送る会に向けて、仲間と協力することができる。

本実践では、個々の指導目標をより具体的に設定し、それを評価の規準とした。

(4) 授業展開の工夫

「3年生が喜ぶダンスを作る」という課題が意識できるよう、導入ではダンスを作るポイントを提示し、実態やねらいに考慮した二つのグループで話し合いながら課題解決を行う授業展開とした。

学習活動
①本時の活動を確認し、活動の目的を知る
②チームに分かれてダンスの振りを作る
③話し合った振りを発表し、評価を行う
④全員でダンスをする

(5) 支援の工夫

学習活動②

- ・どの生徒も話し合いに参加できるよう、実態やねらいに応じて、ダンスを作るポイントにのっとった話し合いができるAチーム(A男、C男)と言葉によるコミュニケーションが苦手なE女がいるBチーム(B男、D男、E女)の二つのグループを設定した。
- ・Aチームには、二人が共通した判断基準でダンスの振りを点数化できるように「笑顔」「大きな動き」というポイントをイラストと数直線で示した。また、振りに対する評価の点数とその振りを選んだ理由を「話し合いボード」に書いてお互いに確認し合うことで、チームとしてどのダンスを選ぶか意見を調整できるようにした。
- ・Bチームには、E女が考えた振りを得意な絵で表現できるよう、顔と胴体が描かれた絵カードを用意し、そこに描かれた振りをもとに、3人で話し合いを進められるような手順を示した。

学習活動③

- ・学習活動①で提示された「ダンスを作るポイント」を再確認することで、明確な課題意識をもって話し合いに参加できるようにした。

3 結果

(1) 評価規準と個の評価 単元の開始と終了時

	評価規準	評価	
		始	終
A男	自分の決めたダンスについて仲間に説明することができたか。	×	◎
B男	自分の考えをE女に分かるように、身振り手振りで伝えることができたか。	○	◎
C男	話し合いの場面で、友達の考えを聞いて互いの意見を調整することができたか。	×	×
D男	改善するところを仲間に分かるように伝えることができたか。	○	◎
E女	自分の考えた振りを絵に描いて伝えることができたか。	—	◎

注) ◎:一人で ○:手がかりを用いて △:教師の直接的な支援で ×:難しい —:活動機会なし

(2)「やり取りしながら思考を働かせること」を視点とした生徒の変容

- ・学習活動②のAチームでは、「3年生が喜ぶダンスを作る」という目的に向かって、どのようなダンスが求められているのか、そのためには選択肢として挙げた振りの中からどの振りを選べばよいのか、互いに付けた点数を見ながらチームで活発に話し合うことができた。最初は自分の考えた振りを押し通そうとしていたが、その点数を付けた理由を文章で記すことにより、自分の思考の過程をより明確にし、ポイントに沿った振りであることを確認しながら相手に伝えることができるようになった。また、相手の考えも明確に分かり、それにどう応答することも考えられるようになった。
- ・学習活動②のBチームでは、E女の描いた絵をもとにチームで話し合うことができた。初めは自分が考えた振りではなく、友達の考えた振りを見てそれを絵に表すだけであったE女が、次第に自分のやりたい振りを考え、それをチームに伝えようとするできるようになった。また、B男、D男も、E女を理解しようとするできるようになった。
- ・学習活動③では課題意識をもって話し合いに参加できたため、生徒同士の相互評価が価値ある評価活動となった。

4 考察

支援ツールを整え、解決の必要性が感じられる課題を設定することにより、生徒たちは自らの思考を働かせながら課題に取り組むことができた。協働的な学びを行うためには、協働する必要性のある課題設定、課題達成に向けて生徒がやり取りしながら思考を働かせるための工夫が必要であることが分かった。また、個に応じた協働的な学びへの参加の仕方があることが確認できた。

(FUKE Mika, TAKIZAWA Ken, MUSASHI Hirohumi)